

**<書評>カーター・J・エックカート『朴正熙と近代朝鮮  
軍国主義の起源一八六六 一九四五年』**

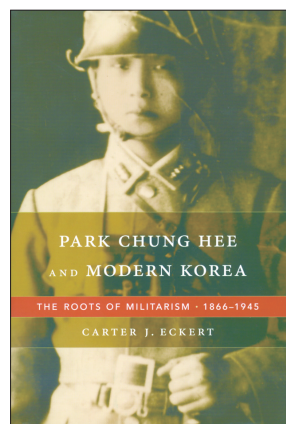
著者	松田 利彦
雑誌名	日本研究
巻	59
ページ	128-132
発行年	2019-10-10
その他の言語のタイトル	Carter J. Eckert, Park Chung Hee and Modern Korea: The Roots of Militarism, 1866 1945
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00007329">http://doi.org/10.15055/00007329</a>

カーター・J・エックカート

## 『朴正熙と近代朝鮮——軍国主義の起源 一八六六—一九四五年』

Carter J. Eckert, *Park Chung Hee and Modern Korea: The Roots of Militarism, 1866–1945*

松田利彦



Harvard University Press, 2016

本書『朴正熙と近代朝鮮——軍国主義の起源 一八六六—

一九四五年』の著者カーター・エックカートは、一九九一年の著作<sup>①</sup>

において、植民地期朝鮮における朝鮮人資本家の成長を論じるこ  
とでいわゆる植民地収奪論に異議を唱え、論争を巻き起こした。

そのエックカートが、今度は、朴正熙（一九一七—一九七九年）の伝記を  
書くという。大韓民国歴代大統領のなかでもっとも毀誉褒貶<sup>きよほうへん</sup>が

激しいとされる朴正熙については、すでに重要な伝記的研究がい  
くつか出ている。本書がそこにいかなる新たな洞察を加えるのか、

東アジアの近現代史研究に関わる研究者にとって、大いに気にか

かるところであろう。（なお、以下では「満州（国）」のカッコは  
省略した。）

以下、本書の内容を追っていこう。序章では、朴正熙政権

（一九六一年軍事クーデターにより国家再建最高会議議長に就任、

一九六三—一九七九年大統領）のもとでの韓国近代化の雛形は、朴正熙

が一九四〇年代、満洲国陸軍軍官学校と日本陸軍士官学校におい  
て内面化した軍隊生活モデルにあつたとして、それを掘り下げる

ことを目指すとしている。<sup>②</sup>

第一章「軍事化の時代——戦争の波」では、朝鮮における軍事  
化 (militarization) には歴史的に二つの波があつたとする。第一の波

は、十九世紀末から二十世紀初頭である。すなわち、伝統的に武

を文より低く見ていた朝鮮王朝では、一八六〇年代以降の洋擾に

対応して、まず大院君政権が軍事改革に着手した。そして、大韓

帝国期、高宗皇帝の主導した軍備拡張と近代化が、第一の波にお

ける軍政改革の頂点となった。「大韓帝国軍は結局のところ韓国併合から国を救うことはできなかったが、朝鮮王朝末期の軍事化の試みという、より大きな歴史的意義を看過してはならない」（四四頁）と評価している。

第二章「精神の軍事化——軍と国家に対する新しい考え方」は、朝鮮開化派が開港後の早い時期から軍事制度と国家近代化の連関性を認識していたと論じ、兪吉濬と朴泳孝の事例を取りあげる。日本の侵略が強まるにつれ、救国のために武を重視する思想が現れた。植民地期も、一部の朝鮮人エリートがこうした軍事思想を継承し「文弱」を批判した。

第三章「軍事化の場所と人——士官学校と士官学校生徒」では、朴正熙の性格形成に決定的な意味をもったとされる日本と満洲国での士官学校教育に焦点を当てる。著者の枠組みでは朝鮮軍事化の「第二の波」とされる日中戦争全面化以降の時期に当たる。朴正熙は、一九四〇年に満洲国陸軍士官学校に入学、四二年に日本陸軍士官学校に編入し四四年に卒業した。日滿の士官学校への朝鮮人入学者は満洲事変後増加したが、本書はその入学動機を分析しつつ、朝鮮人士官学校生徒・将校を「親日派」と見なす従来の議論には慎重に距離をおく。士官学校において「日系」と「満系」生徒の狭間で曖昧な立場に置かれた朝鮮人生徒は、概して日本軍の価値観を忠実に身につけた「まじめ」な学生という位置を

占めた。とりわけ朴正熙は、軍隊へのあこがれを強く持ち模範的かつ情熱的な生徒であり、この時代の「朴正熙の「馬鹿真面目」ぶりが究極的には一九六〇年代・七〇年代韓国の近代化志向の国家と社会を形作った」（二〇三頁）とされている。

第四章「政治と地位——特別な志向」は、士官学校教育を通じて軍の特権的意識の形成について論ずる。日滿の士官学校はいずれも一般社会と隔絶していた。生徒は厳しい身体規律を求められ、外界の娯楽から遮断されていた。他方、明治維新から日清・日露戦争、満洲事変にいたる日本陸軍の栄光の歴史とのつながりは常に意識させられ、戦史教育や戦跡見学によって強化された。朝鮮人は天皇を日本人ほど神聖視化していなかったとは言え、士官学校教育は天皇の股肱（ここう）という意識を生徒に扶植する役割をはたした。

第五章「政治と権力——唯一の義務」は、軍人の政治関与について論ずる。一九三〇年代、日本で青年将校が「昭和維新」を呼号していたことに加え、朝鮮では、甲申政変五十周年特集や革命一心会事件（一九〇〇年）についての当事者の回顧が出回っていた。それらは、日滿の朝鮮人士官学校生徒に軍人の直接行動を賞揚する心性をもたらし、加えて満洲では、五・一五事件や二・二六事件の連累者が優遇され、彼らの思想も士官学校生徒に影響を及ぼした。

第六章「国家と社会——革命、改革、統制」は、戦時期の経済

思想について論じる。著者の見立てでは、解放後韓国における朴正熙政権の開発独裁体制の淵源は、世界恐慌以降の日本の国家資本主義志向に求められているからだ。日満の士官学校に広まっていた三つの反資本主義的議論として、朝鮮人・中国人生徒に民族解放理論として受け入れられたマルキシズム、財閥を敵視し対外膨張とも結びついた昭和維新論、総力戦イデオロギーとしての統制経済論を取りあげている。なお、朴正熙が共產主義に傾倒していたのかどうかをめぐる議論に対し、本書は、朴正熙が満洲国軍官学校に入るまでに左翼思想に「馴染んでいた（no stranger）」のは間違いなく、共鳴していた（sympathetic）としてもおかしくなかった」とする立場をとっている（二〇〇頁）。

第七章「戦術と精神——必勝」は、日満の士官学校における精神教育に注目する。歩兵による突撃主義や夜間襲撃は、講義や実地演習あるいは剣道の稽古で教え込まれた。「必勝の信念」や「一死御奉公」といった精神主義は、解放後韓国の朴正熙の軍事クーデターを支える同志を同調させる基盤となったとされている。

第八章「秩序と規律——自発的な服従」では、朴正熙政権、特に一九七二年以降の維新体制に見られる社会統制と規律の淵源を探る。日満の士官学校では、起臥寢食に至るまで規律化された。著者はフーコーの規律権力論を援用しながら、身体動作や時間厳守などの規律が、区隊長などの上からの監視や暴力的制裁、生徒

同士の相互監視、日記を書くことなどによって内面化された様相を描いている。

終章では、日本敗戦による日満の軍官学校の終焉<sup>しゅうえん</sup>を跡づけ、日本陸軍の文化を内面化した韓国人将校が解放後の韓国軍を創建していく記述で結ばれている。

本書を通読した読者は、本書が多くの資料を駆使して日満の士官学校の雰囲気を生き生きと再現していることに、まず感銘を受けるに違いない。本書によつて、朴正熙の呼吸した時代の空気を読者とともに味わうことができるだろう。言語の壁をもとめせず、満洲国陸軍軍官学校における日本人・朝鮮人・中国人元生徒の回顧やインタビューを縦横に駆使している。また、朴正熙の満洲国軍官学校における同級生（第二期生）だった細川実の日記（一九四一〜四二年）を発掘したことも大きな意味をもつ。これらの資料を巧みに組み合わせながら、士官学校の文化を「団結」「意志」「切磋琢磨」などのキーワードによつて切り取り、生徒たちの精神世界を示してみせた手腕はさすがと言えよう。

また、朝鮮王朝末期から植民地にかけての朝鮮における軍事化の流れを、大胆に描いたことも大きな特徴である。

しかし、これらの本書の優れた点は、同時に問題点とも表裏一体であるように感じられる。

第一に、既に別の書評が指摘しているように、書名から予想されるような朴正熙の伝記的記述は乏しく、その時代背景の方がむしろ前面に出ている。<sup>④</sup> 著者は、朴正熙が日本陸軍のエートスを吸収したことが解放後韓国における朴政権による経済成長の性格を決定づけたと、たびたび強調している。無論、そのことは否定しえないだろう。しかし、日満の士官学校生徒がみな朴正熙のように、戦後東アジアにおいて国家の近代化を担う独裁的国家指導者として登場したわけではない。であるならば、なぜ朴正熙のみが日本軍の価値観を国家運営に応用しえたのかも問われなければならないまい。しかし、本書は朴正熙の置かれた「環境」を問題にしても、それを受けとめ内面化した朴正熙の「個性」については、ただ「馬鹿真面目」だったという見解を示すにとどまっている。

また、日満の士官学校を並列して分析しているために、満洲国軍官学校後に日本の陸軍士官学校に進んだ朴正熙の思想形成過程が時系列的に捉えられているわけではない。これらの点では趙甲濟<sup>チョウカチ</sup>の朴正熙伝に及ばない。

第二に、朝鮮における軍事文化の形成史として本書を読んだ場合でも、スケールの壮大さとそれが故の議論の細やかさの不足の両方を感じたというのが率直な感想である。第一章における朝鮮開港後の軍事化については、大院君や高宗、急進開化派に焦点をあわせるあまり、たとえば富国強兵路線とは異なる「小国主義」

を志向した穏健開化派の思想的営み<sup>⑤</sup>は度外視されている。また、この時期の軍事制度の変化は描かれているものの、一般民衆の軍事観・軍隊観については検討していない。そのために、植民地期末期、朝鮮軍事化の「第二の波」を多くの朝鮮人が肯定的に受けとめたとし、かつ、そこには朝鮮王朝における「第一の軍事化の遺産を指摘せねばならない」(六三頁。一〇八、一五六―一五九頁なども同様)とする本書の主張には必ずしも得心がいかなかった。戦時期朝鮮社会において、軍人の直接行動をメディアが賞賛し社会全体が軍事化したとしても、それがどの程度まで受け入れられたのだろうか。日中戦争期、朝鮮人陸軍志願兵制度が実施されても上流家庭は志願せず多くは貧困農民が経済的理由から志願したとされること、一般民衆は日帝敗戦願望をもち戦争に距離をおいていたとされること、など反証はいくらもあげることができよう。<sup>⑦</sup> まずはそのような通説的なイメージに丁寧に向き合ったうえで議論を展開すべきではなかっただろうか。

本書は第二巻の刊行が予定されており、朴正熙大統領のもとでの国家主導型経済開発の様相を描くとのことである。本書評の示したいくつかの疑問点にもそこで回答が用意されているのかもしれない。また、冒頭でも触れたように、著者は、かつて植民地下における朝鮮人資本であった湖南財閥について大著を著した(註(1)参照)。同書は、戦後韓国の経済成長のルーツが植民地期に

あつたとするいわゆる植民地近代化論の一つの火付け役ともなった。そして本書も、やはり経済成長を主導した朴正熙の行動原理の源流を植民地期に求めようとしている。すなわち、両著には、戦後韓国における経済成長の淵源を植民地期に探ろうとする問題関心が一貫している。前回の著作で着目した朝鮮人資本家と今回の著作の焦点である国家指導者がそれぞれのように韓国の経済成長に関わったのかについて、大きな見取り図を続巻では提示してくれることも期待される。

註

- (1) Carter J. Eckert, *Offspring of Empire: The Kachang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism, 1876-1945* (University of Washington Press, 1991). 邦訳は、カーター・J・エックアート『日本帝国の申し子——高敞の金一族と韓国資本主義の植民地起源 一八七六—一九四五』(草思社、二〇〇四年)。
- (2) 飯倉江里衣「満洲国陸軍軍官学校と朝鮮人——口述資料を通してみる教育経験」(『朝鮮史研究会論文集』第五四号、二〇一六年一〇月) 一六四頁、註(1)(2)に、朴正熙についての伝記的研究および満州国の軍官学校における朝鮮人についての研究についての既存の文献があげられている。
- (3) このような視角は、著者エックアートがかねて提唱していたものであり、本書はその本格的展開を目指したものである。カーター・J・エックアート「五月一六日軍事革命——歴史的視点」(趙利済・渡辺利夫・カーター・J・エックアート編『朴正熙の時代——韓国の近代化と経済発展』東京大学出版会、二〇〇九年) 参照。

- (4) Bruce Cummings, "Carter J. Eckert, *Park Chung Hee and Modern Korea: The Roots of Militarism, 1866-1945*," Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2016, "The American Historical Review 123:3 (June 2018), p. 928.
- (5) 趙甲濟『朴正熙——韓国近代革命家の実像』(邦訳、亜紀書房、一九九一年)。
- (6) 趙景達「近代朝鮮の小国思想」(菅原憲二・安田浩編『国境を貫く歴史認識——教科書・日本、そして未来』青木書店、二〇〇二年)。
- (7) 宮田節子「朝鮮民衆と「皇民化」政策」(未來社、一九八五年)、十恩眞『日帝末抗日秘密結社運動研究——独立斗解放、建国을 향한朝鮮民衆의努力』(신원、二〇一八年)。